

## 武蔵野日曜集会 祈祷会

## 信無き我を助け給え

――マルコ伝第9章14～29節――

1975年3月9日

小池辰雄

ああ信なき代なるかな 超文化 平伏して受けとる 即神一如 絶信の信 聖名によりて命ず  
祈りで御霊の充填 祈り

## 【マルコ9・14～29】

14 相共に弟子たちの許に來りて、大なる群衆の之を環り、学者たちの之と論じいたるを見給う。15 群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて礼をなせり。16 イエス問い給う『なんじら何を彼らと論ずるか』17 群衆のうちの一人こたう『師よ、唾の靈に憑かれたる我が子を御許に連れ來れり。18 靈いずこにても彼に憑けば、痙攣け泡をふき、齒をくいしばり、而して瘦せ衰う。御弟子たちに之を逐い出すことを請いたれど能わざりき』19 爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れきたれ』20 乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、靈ただちに之を痙攣けたれば、地に倒れ、泡をふきて転び廻る。21 イエスその父に問い給う『いつの頃より斯くなりしか』父いう『おさなき時よりなり。22 靈しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡ぼさんとせり。然れど汝なにか為し得ば、我らを憫みて助け給え』23 イエス言いたもう『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』24 その子の父ただちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』25 イエス群衆の走り集るを見て、穢れし靈を禁めて言いたもう『唾にて聾者なる靈よ、我なんじに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』26 靈さけびて甚だしく痙攣けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言う。27 イエスその手を執りて起こし給えば立てり。28 イエス家に入り給いしとき、弟子たち竊に問う『我等いかなれば逐い出し得ざりしか』29 答え給う『この類は祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり』

## ●ああ信なき代なるかな

では、マルコ伝9章14節から。



<sup>14</sup>相共に弟子たちの許に來りて、大なる群衆の之を環り、學者たちの之と論じいたるを見給う。

前に、ペテロ、ヨハネ、ヤコブという三人の弟子がありましたね。だから、ペテロ、ヨハネ、ヤコブと、その他の弟子たちのことです。それも一緒にやつて来て、

<sup>15</sup>群衆みなイエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて礼をなせり。なぜ、いたく驚いたかという、キリストは9章の前半で、ヘルモン山で変貌をきたしている。もの凄くキリストは靈に満ちていらつしやるわけです。キリストが並みならぬ様相だものだから、それで、

「イエスを見るや否や、いたく驚いた」

わけです。非常にここのははつきりしてます。この変貌の山というのは、死人の甦りの予表ですから。これはヘルモンの山です。

<sup>16</sup>イエス問ひ給う『なんじら何を彼らと論するか』<sup>17</sup>群衆のうちの一人こたう

『師よ、嘔の靈に憑かれたる我が子を御許に連れ來れり。』

嘔の靈に憑かれた我が子を御許に連れて來た。何か靈的な――靈にはいろんな靈がありますが――その靈の作用によって嘔になつてしまつて、ものが言えないわけです。

<sup>18</sup>靈いずこにても彼に憑けば、

ひつついてしょうがないと。

癲癇け泡をふき、齒をくいしぼり、而して瘦せ衰う。御弟子たちに之を逐い出すことを請いたれど能わざりき』<sup>19</sup>爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、

「信なき代」というのは、もう弟子も民衆もみんなダメだ、不信のジェネレーション（世代）だと。

我いつまで汝らと偕におらん、

もう愛想をつかしてしまふ。「いつまで汝らと偕におらん」なんて、キリストもちよつと捨てばちなわけです。

何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れきたれ』

イエスというひとは神学者ではないけれども、

「自分が十字架を通るまでは本当のものは來ない」

ということは一面、分かつていらつしやるんです、ちゃんと。それでありながら、この相対的な世界で、信仰の世界でも、

「もつとお前たちは端的に信じたつていいではないか」

というわけですよ。そうすれば、ある程度の働きはあるはずなんだけれども、それもダメだと。

「何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許に連れて來い」



と。

20 乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、霊ただちに之を瘳<sup>ひきつ</sup>擧<sup>あ</sup>げたれば、地に倒れ、泡をふきて<sup>まろ</sup>軛<sup>まわ</sup>び廻る。

イエスみたいな非常に霊的な人物がくると、他の霊はそこで騒ぎだすわけです。それで、ある働きをする。これをひきつけさせてしまった。癲癇のように地に倒れて泡をふいてしまった。この癲癇現象みたいなものもやはり、霊的な作用によつて起きるわけです。この「唾の霊」と言つたつて、ひきつけるから、そうすると、ものが言えなくなる。

キリストが神の子であることを一番先に告白したのは、やはりマルコ伝5章にあつて、やはり気違いみたいなやつ。そして、キリストのことを「神の子」と言つたものだから、「私を表すな」とキリストは言われた。普通の人には分からないです、「神の子」ということは。ところが、悪霊には分かる。やはり、霊的な次元ですから。マルコ伝5章の始めにあつたでしょ。

「5 夜も昼も、絶えず墓あるいは山にて叫び、己が身を石にて傷<sup>きず</sup>けいたり。かれ遙<sup>はるか</sup>にイエスを見て、走りきたり、御前に平伏し、7 大声に叫びて言う『いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、神によりて願う、我を苦しめ給うな』」8 これはイエス「穢<sup>けが</sup>れし霊よ、この人より出<sup>い</sup>で往<sup>ゆ</sup>け」と言い給いしに因<sup>よ</sup>るなり。9 イエスまた『なんじの名は何か』と問い給えば『わが名はレギオン、我ら多きが故なり』と答え、10 また己らを此の地の外に逐いやり給わざらんことを切に求む。』（マルコ5:5～10）

「穢れし霊よ、この人より出<sup>い</sup>でよ」

と言つて、キリストは出してしまった。豚に入れさせてしまったという有名な話がある。そういうように、霊には霊が見えます。

## ● 超文化

19 爰に彼らに言い給う『ああ信なき代<sup>よ</sup>なるかな、我いつまで汝らと偕<sup>とも</sup>におらん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我が許<sup>もと</sup>に連れきたれ』

我々もうっかりするとキリストに、

「ああ信なき代なるかな。お前たちの信仰は、それは信仰か」  
なんてやられてしまう。

まあ、とにかく、信仰は捨身でかなければダメです。まだ、みんな整いすぎている。何か文化的次元の中におさまっているところがある。

なるほど、我々は文化文明の世の中にいますけれども、信仰の世界では、その次元におさまっていたら、いつまでたつても始まらない。その文化文明的な人間の自律的な世界の直接判断の、あるいは直接思惟<sup>しゐ</sup>、思考のそういった次元から抜け出なくてはいいかん。出文



化ではなければダメですから、この信仰の世界は。

そうすると、それは反文化かというところ、そうじゃない。超文化なんです。文化に反するのではない。文化文明の世界を超越した世界に自分を入れなくてはいけない。そうすると、今度は逆に、本当の文化の花が咲くんですが、問題はそこなんです。

たいてい、いい加減なクリスチャンは、文明の世界にいて、アクセサリ的に

「私は信仰がございます」

なんてやっている。体裁信仰です。ところが、キリストや使徒たちの信仰は、捨身でかかってくるものです。

まあ、あの原始福音の人たちの祈りを聞いていると、やっぱり、そういった捨身の迫りが確かにある。我々がないというのではないですよ。だけれども、彼らは確かにその響きを持っている。本当に泣き叫ぶような祈り方をやるからね。普通の人はずっとびっくりしてしまふ。

けれども、ああいう時に、自分も泣き叫ぶと思う必要はないですよ。その泣き叫ぶような、その中に楽に入れる。聞いていて、その中に。というのは、同じ泣き叫びでなくて、静かな世界でありながら、同じような質の中に入るといふ、コツが分かってきたらいいんです。

私には私の在り方がある。私には私の祈り方がある。いいですよ、みんなそれぞれで。ただし、

「その次元がそういうもの凄い次元か」

ということだけが問題なんです。静かに祈っても、囁くように祈っても、泣き叫ぶように祈っても、次元が、本当に自分が捨てられているときがある。それならそれでいい。本当は、もうそうなつてくると、実は泣き叫ぶよりもっと凄い世界に入れる。ですから、バカみたいなことですけれども。あなた方もまだ若いから、あるところはだんだん通ってくる必要もあるけれどもね。まあいいです。

### ●平伏して受ける

「ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん」

と。こうキリストに言われたら、これを読んでいたら、どういうようにしてこれを受けとつたらいいか。

「さて、ひとつ、もっと信仰を強くしましょう」

なんていつて読んでいたらダメですよ。こう言われたら、降参してキリストの中に入ればいい。

「信なき代なるかな」

と言われたら、

「(う)もつともで(う)ざいます、自分は。ダメで(う)ざいます」



と降参する。

妙にすねたり、何か妙にシユンとしちゃったり、えらく難しい顔してみたり（笑）。私は、日曜日に壇上で話しているだろ。そうすると、分かるんだよ、皆さんの顔を見ていると。

「これは本当に受けとっているかどうか」

というのが。それは、平伏しの姿で楽に受けとっていくと、降参したという人の中に入ってくるんです、本ものが。

「私の信仰はだいぶきているんだが、もう少し信仰を強くするかな。ああ言われたんじゃない」

なんてな判断ではダメです。「信なき代なるかな」なんて言われたら、こつちを本当に徹底的にマイナスにして、そこに降参する。そうすると俄然、反対のもの凄い信の中に入る。それはその直ぐあとに書いてある。

24その子の父だちに叫びて言う『われ信ず、信仰なき我を助け給え』

「われ信ず、信仰なき我を助け給え」

という言葉です。この22節、この言葉がそれなんです。「われ信ず、信仰なき我を助け給え」と。これはもう少し先へいつてからやります。

### ●即神一如

キリストはそう言つて、

その子を我が許に連れきたれ<sup>もと</sup> 20 乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、霊

ただちに之を痙攣<sup>ひきつ</sup>けたれば、地に倒れ、泡をふきて転び廻る。21イエスその

父に問い給う『いつの頃より斯<sup>か</sup>くなりしか』父いう『おさなき時よりなり。

小さいときからダメなんですと。

22霊しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡ぼさんとせり。

まあ、今の普通の医学だったら、これはきつと癲癇<sup>てんかん</sup>でしょ。

然れど汝<sup>な</sup>なにか為し得ば、我らを憫<sup>あわれ</sup>みて助け給え』

「どうにもならんですが、あなたが何かおできになるのですしたら、どうか憐れんでください」と。

23イエス言いたもう『為し得ばと言うか、

『為し得ば』なんて、ひとのことを仮定して何をぬかすか』

と。「為し得ば」なんて、

「もしおできになるのですしたら」

なんてね。

「あなたは何でもおできになるんです」

と言わなくては。しかし、キリストは何もできない。キリストを通して神さまがするんです。



信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』

これはキリストの告白ですよ。

「私は神さまを本当に信じています。そうすると、何でもできるわけなんです」

というのが、この裏の言葉です。「為し得ば」なんて言っているのではない。

「神さまを信ずる」

というのは、全く信頼することです。神に全托し、自分を即神、神に即さしむ。神に自分を投げ捨てて、即神一如の世界に入ると、一切ができるようになる。

「火渡り」とか、「潔め」とか言うが、これが私たちのいわば火渡りなんです。

「神に自分を投げ入れる」

ということ。神に本当に自分を投げ入れることが、神という霊火の中に自分を入れることです。神という霊火の中に本当に自分を入れる。そのためにはじつと30分でも1時間でも祈っていていいですよ。全身が本当にその現実か。私は即神しているか。あるいは瞬間的に入れるかもしれない。要するにいろいろですけれども。

それは、いつも申し上げているように、十字架なんです。キリストの十字架を瞑想して入る。さつき歌った讃美歌39番に、十字架を瞑想してどうのこうのという。

「十字架のくすしき光

閉ずる目にあおがしめ

みさかえにさむるまで

主よ、ともに宿りませ」

と書いてあったでしょ。閉ずる目に十字架の事態を祈るという。私はさつき讃美歌を聞いていて、あそこが一番グツときた。

今朝も言った、ガラテヤ書2章20節。そこへくると、これはもう卒業できないんです、我々は死に至るまで。もう限りなくそこへ深く入るだけです。そうすると、自分がなくなってしまうからね。これが本当に「信ずる」です。「信入」といつか言った。信じ入る。信入していくと、すべてのことが為し得られる。

「為し得られる」と言うのと、

「果たしてできるだろうか？」

なんて、すぐまたそう思う。

「そうでない場合もあるじゃないか」

と。今の頭はみんなそういうふうに通くね。

「例外もあるじゃないか」

と。そんなくだらない考え方をしないでください。

「信ずる者にはすべてのことが為し得らるるなり」

というこの断定的な言葉。現象的にはできないかもしれませんが。しかし、できない現象



の相対的現象の奥の世界で、「できる」という、「できている」という世界を受けとっていただく。

これがもう一番凄い信仰の世界なんです。それが私の言っている根、源、現実、です。根源の現実ではすべてのことが為し得る。本当に受けとっていけば、為し得ているんです。相対的現象面では、まだ未完成であり、為し得ないかのごとくであっても、もうひとつ奥の世界では為し得ている。

癌にかかった。癌は死病である。けれども、キリストの生命を本当に受けていけば、癌という現象がなおそこにあっても、それに打ち勝った霊体の健やかな世界を受けとっている。勝っているんです。相対的な自分が死んでも、死なない。それだけのところを本当に受けとっていきたいんです、我々の信仰は。だから、

### 「信ずる者にはすべて為し得る」

と。キリストはその根源現実と相対現実が一つになっている畏ろしいひとですけれども。

## ●絶信の信

### 24 その子の父たちに叫びて言う『われ信ず、

「われ信ず」は「クレド―」「ピステオー」という。

### 信仰なき我を助け給え』

これが、私が言っている絶信の信ということ。自分の相対的信仰なんか問題とならない。もうしようがないです。雲が来たり去ったりするように、そういうフラフラな信仰なんてものは、あれどもなきがごときで、そんな信仰はもう問題にならない。ということが、

### 「信仰なき我を助け給え」

ということ。そして前の、

### 「我信ず」

が非常に力強い言葉になる。「我信ず」と言うときに、この「我信ず」という言葉が本当に力を持ったためには、神さまの本願の信を受けとっていないと、この「我信ず」が力にならないですよ。ただの力みになつてしまう。奥で、

「私は、お前がどんなものであっても、お前を捨てないぞ。人に何と言われても、

私はお前を救うんだ」

という神さまの絶対恩寵の中に入ると、この「我信ず」がもの凄い力になる…（異言）…。

もう私は異言になつてしまう。それが「我信ず」です。

### 「信仰なき我を助け給え」

と、もうあとは楽に。もう、「我信ず」だけでもいいくらいなものです。これが自分の相対的信仰に絶した信の世界。本願、即、悲願の世界です。ちょうど、今日の午前のお話にこれは相呼応するところで、いいところです。



## ●聖名によりて命ず

25 イエス群衆の走り集るを見て、穢<sup>けが</sup>れし靈<sup>いまし</sup>を禁めて言いたもう『啞<sup>おうし</sup>にて聾<sup>みみしい</sup>者なる靈よ、我なんじに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』

これを、私たちは、信仰の世界でキリストと同じことが言えなくてはいけないんですよ。

「我なんじに命ず、聖名によりて命ず」

と。これは我々は、

「聖名によりて命ず」

と言わなくてはいいかん。

「我、聖名によりて命ず、この子より出でよ。重ねて入るな」

と。私は療養所やなんかで、しばしばこれをやった。泡をふいちやったりなんかするものな。それから、お母さんの霊が入っちゃっているのがあった。お母さんが入っているものだから、その人が精神的に成長しない。肉体的にもうまくない。これはN君の奥さんの入っているやつやった病室の隣の病室の話だ。KさんとN君の奥さんが入っている部屋でお話したら、私は声がでかいものだから、隣の部屋に聞こえてしまって、そしたら、隣の部屋に伝道してしまった、自然に。それで、

「こつちへ来てくれ」

というわけで、そつちに行つて話した。甲の人が、

「夜になると、乙の人が妙な声を出す。乙の人の普通の声でない声を出す」

というから、

「どういうことですか？」

なんて、乙の人の生い立ちを聞いたたら、

「お母さんが自分の13歳のときに、非常に私を愛して惜しんで死んでしまった」

と言う。それで、私はピンときた。ああ、お母さんの霊が来ているなと思った。

「それはお母さんの声でしょう」

と。言う人は分からないんですけれども。お母さんがこの人の中で苦しんでいる。だから、私はその人に手を置いて、

「お母さん、お母さん。ご心配いりません。この人はキリストのお助けによつて、充分これからいきますから。聖名によつて、お母さん、どうぞ天界へいらつしやつてください」

と、執り成したんです。お母さんは天界へ行つてしまった。その晩から何も言わない。翌朝、痰をたくさん吐いたという。

私はちつとも霊的な男ではないけれども、そういうことを聖名によつて本当にしたら、そういうことになるからね。それでこれが、

「聖名よつて命ず。この子より出でよ。重ねて入るな」



というわけですね。で、その人はだんだん良くなったという話です。それから先のことは知りませんが、

### ●祈りで御霊の充填

26 霊さ<sup>はなは</sup>け<sup>ひきつ</sup>びて甚だしく痙攣<sup>けいれん</sup>させて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言う。

そうなんですよ、ガタンとなつてしまう。ヘタすると、だんだん冷たくなつてしまう。御霊でもつて息を吹き返させないとね。

27 イエスその手を執<sup>と</sup>りて起こし給えば立てり。

それはキリストですから、すぐ聖霊が入る。生命を入れてしまう。それで、立つたと。放つておけば、これは死んでしまう。

御霊の世界は、とにかく、キリストに祈ることです。自分の自信ではない。キリストはすべてを為したもうから。キリストに祈れば、必ず勝つ。

時々お話したように、呪われた人を助けたこともあった。この頃はもうそういう妙な現象が起きないね。起きたら、やるけれども(笑)。あの頃は本当にいろんなことがあったよ、昔は。どうして、あんなにいろんなことがあったかな。

「ヘビが食いつく」

なんて言つてね。祈ると、天から銀の剣が下りてきて、ヘビの口にはさまつてしまつて食いつけなくなつたとか、いろんなことを言うから、おもしろいなと思つた。ヘビというのは、あれはとにかくサタンの動物だよね。あれをいい加減に殺すといかん。とにかく、生き物を殺したら、必ず――南無妙法蓮華経や南無阿弥陀仏ではないけれども――キリストの聖名によつて執成すといい。生き物というものはみんな霊があるから。

28 イエス家に入り給いしとき、弟子たち窃<sup>ひそか</sup>に問う『我等いかなれば逐い出し得<sup>たぐい</sup>ざりしか』<sup>29</sup> 答え給う『この類<sup>たぐい</sup>は祈<sup>よ</sup>に由らざれば、如何<sup>いか</sup>にすとも出でざるなり』

「祈に由らざれば」というのは、キリストは、「命ずる」なんて言つたつて、もう必ず奥の方でパツと祈りの世界に入つていらつしやるわけですよ。

だから、普段やつぱり、祈りの世界で魂が御霊によつて充填<sup>じゅうてん</sup>されてなくてはいかんですよ。祈りが抜けていたら、もうダメですから。聖書を読むことが同時に祈りであるような読み方をしないと。とにかく、聖書を読んでいて、生命が来なかつたら、本当の祈り心で読んでいない。頭で読んでいる。祈り心で自分をその中に突入させて――信入だからね――信入しながら読んでいれば、読むこと事態が祈りなんです、その中でもつてグーッときているとね。だから私は、

「もう話すのが面倒臭くなる」



なんて、申し訳ないことを言うんだけど。

そういうわけで、今日はこの、

「我信ず、信仰なき我を助け給え」

というところ、それから、

「信ずる者はすべてのことを為し得るなり」

と。この二つの句の本当の中身をちよつと申し上げました。大事なことですけれども。

### ● 祈り

祈ります。二千年前のイエス・キリストさま。今もなお、二千年を越えて、私たちにこの御言を通して、直々の現実として迫りたもう、この不思議なことを感謝し奉ります。

主さま、本当に、いついずこにおきましても、心の、魂の底から聖名を呼び奉れば、あなたは直ちに私たちに答えたもう。そして、「主よ！」と全身をあなたの中に投げ入れるときに、「我信ず」ということの本当の事態が、あなたのこの掴みかかり、呼びかかりによりまして、受けとることができて感謝です。

かくして、「我信ず」ということが、力みでも何でもなく、

「我信ぜざるを得ず」

と本当にかく言わざるを得ません。

主さま、どうぞ、私たちはその信より、また「信仰より信仰へ」とは、実にそのようにして、

「あなたの中へと中へ」

と進んでいくことが、「信より信へ」であることをいよいよまた受けとり、このことはまた本当に、あなたのご愛を、私たちに力あるところのあなたの聖霊の御愛を受けとることであることが直ちに即して、感謝です。

どうぞ、いかなる時も、絶対に行き詰まることなく、また決してうろたえることなく、この根源現実においていつもあなたと共に勝つてまいります。どうぞ、そのようにして、主さま、勝ちにまた勝つて、「雄々しかれ」とは正にあなたの中に入ることが本当の雄々しさであることを受けとり、感謝です。

どうぞ、この兄弟姉妹たちが、あなたのご愛の溢れる存在とせられ、泉の如くに、主さま、私たちはあなたの愛の源泉滾々たるところの事態をいよいよ身をもつて証し、隣人を助け温め救っていくことができますように、切に願ひ奉ります。私たちの人生の本当の意味は、ただ人を助けることだけです。

どうぞ、人助けが本当の意味においてできる、その聖霊の器としていよいよ私たちを自由自在にお用いくださらんことを、またお鍛えくださらんことを切に願ひ奉ります。

心からの感謝と讃美、今、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により献げ奉る。アーメン。

